W. Raabe „Stopfkuchen“ 論

——語りの仕組みと読者の立場 (2)

大 塚　　譲

≪第三章≫　再現を示す諸現象

本稿は，Wilhelm Raabe (1831−1910) の晩年の小説 Stopfkuchen-eine See und Mordgeschichte (1891) の迷路めいた見通しにくい作品構造と根本モチーフを解明することを目的として，前回は時間の仕組みと Ich の視点に焦点を当ててみた。その結果，まず EE, BE, SE[1] という三つの時間レベルが，書き手 Eduard (=Ich) が現にいる SE を定点として遠近法的に統御されてはおらず，それぞれが他の掣肘を受けない現在として並び立っていることがわかった。そのカラクリは，過去の時間レベルである BE と EE が，SE にいる Ich によって没入され追体験された現在としてほぼそっくりそのまま再現される，という手法にあった。であるからこそ，手記中の Ich は，少数の例外を除いて常に，

原稿受領日　1983 年 5 月 6 日

*　構成の変更

前稿では，第三章で「再現を示す諸現象」とともに，「再現という手法から帰結する韜晦構造」をも扱う旨予告したが，後者は「語りのトリック」の問題と併せて第四章とし，次号以降に発表することにした。なお，第五章では象徴とモチーフの問題を扱う予定である。

** 前稿の訂正

前稿 S. 133 の注 (40) と (42) で，Herman Meyer という人名をうっかり Hans Meyer と書いてしまった。Hans Mayer という高名な Germanist がいるだけにこれはまことに紛らわしい誤記なので，ここにはっきりと訂正しておきたい。なお，この訂正は石井不二雄氏の御指摘に負うている。

1) これら三つの時間レベルについては，前稿「W. Raabe “Stopfkuchen” 論 ——語りの仕組みと読者の立場 (1)」(小樽商科大学人文研究第 64 輯 1982 年 10 月) 第一章 S. 119−123 を参照されたい。

後から全知者として物語る Ich ではなく，その時々の現在という状況に放り込まれた体験する Ich なのであって，その体験の様の記述は，この手記が終始現在時制で書かれた方がかえって理解し易かったのではないか，と思いたくなるほど厳密に即事的かつ即時的だ。この点は Ich の視点の内実を細かく検討することによって明らかにしたつもりである。（ところで，以上のような厄介な作業が必要となるのは，書き手自身が自らの用いる手法についてほとんど言及しないに等しいから，もっと直截に言えば，作品全体の背後に鎮座する作家その人ができるだけこの点について読者を無知に留め置きたいらしく，書き手を操って SE なるあらずもがなでこけおどしの時間レベルを設定させてみたり，また登場人物にすぎない Ich に，あたかも全知の語り手のような物言いをさせてみたりするからである。作家がこんなややこしい手管を弄するのは，生来の傾向や資質[2] もさることながら，この際は，彼の究極的な狙いが読者を騙しからかい試すところにある，ということに起因していると考えるが，この点の検討は後の問題に属する。）

さて，この手記の中には，登場人物 Ich の時々刻々の体験の再現，という技法を前提することなしにはほとんど解釈のつかない実に奇妙な文体現象や発話現象が見られる。また，備忘のための私的な覚書，という手記の私性を前提しないかぎり理解に苦しむ記述の欠落現象も見られる。今回の作業はこれらの検討が中心となる。それは，≪第一章≫≪第二章≫における論究を側面から補強する作業であると同時に，手記中の解釈を拒む奇妙な諸現象をも，秘かに用いられている基本的手法に還元して理解しようとする試みでもある。

（一）　文体と発話

(a)　文体現象[3]

2) E. Eisele は，E. Beaucamp の「ほとんどもっぱらその語りの技法に照準を合わせる研究にとって，ラーベのリアリズムはますます困惑と不審の種になるばかりであった」という言葉を引いている。A. a. O. S. 35。

3) この文体現象についての考察は，体験する Ich の視点の変化を文体論的に跡付ける作業ともなるので，第二章で扱った Ich の視点についての論究を側面から補強することでもある。

まず第一に，BE の Eduard (=Ich) の驚嘆の念がそのまま文字と化していると見なすべき場合がある。例えば，アフリカから久し振りに故郷のドイツの町に帰ってきてかつての友人たちと旧交を温めている Eduard は，ある晩酒場 Brummersumm を出て旧友たちと共に満天の星空の下をホテルへ帰る途中，突然再会していない友人 Stopfkuchen のことに想到する[4]。

「Stopfkuchen だ！そうとも，赤の砦の Stopfkuchen だ！ Eduard よ，おまえはこいつを一番おいしい一口のケーキ（Kuchen――筆者）として最後まで取っておいたとでも言うつもりなのか？どんな神様が，今の今まで，この奇妙な友人にして善良な若者をお前の行く手から閉め出しておしまいになっていたんだろう？やっぱり本当に赤の砦の Stopfkuchen だ！たとえ明日アフリカとヨーロッパがおまえの行く手を阻もうとも，おまえはそれらを脇へ押しやって，明日の朝できるだけ早く赤の砦へ向けて出発し，一番太っちょの友人 Stopfkuchen を訪ねるんだぞ。やっぱり正真正銘の赤の砦の Stopfkuchen だ！[5]」

読者には，これを読んでも，Stopfkuchen とは何者なのか，またなぜ Eduard がこの友人を是非明日一番に訪ねようと叫んでいるのか，すぐには全然理解できないはずだ。もっとも，上に引用した箇所に先立って，「私は……またもやただただ古い想い出を蘇らせ，ひたすら次のように思いを廻らした[6]」。とあるので，ここには Eduard の内心に湧き起った興奮がそのまま吐き出されていることは何とかわかるし，また「Stopfkuchen だ！」とか「この奇妙な友人にして善良な若者……」といった奇妙な表現は，おそらくここで Eduard が，大学入学前に別れた当時の姿のままで突如暗い夜道に立ちはだかるように現われ出

4) Eduard は，こうして今ともに夜道をたどる旧友たちを海外でどんなふうに想起したかを思い出すうちに，再会していない Stopfkuchen のことに思い当っているのであって，海外で Stopfkuchen を思い出したかどうかについては触れていない。紛らわしい部分なので念のため一言。

5) S. 11。Herman Meyer は，ここでの “Stopfkuchen” と “die Rote Schanze”（赤の砦）の反復について，「作品を組み立てる形式原理として，ある語の意味の重さを明示する役目を果している」（A. a. O. S. 116）と述べているが，しかしこうした不自然な反復を生じさせ，また許容してもいる語りの仕組みそのものから解き明かす必要があると思われる。

6) Ebenda。

た Stopfkuchen を想起していることを示しているであろう，と何とか当りを付けることはできるかもしれない[7]。しかしこの直後に Stopfkuchen についての何らかの客観的な記述がなされるわけではなく，多少ともまとまった彼についての紹介らしき記述はかなり先まで待たねばならない[8]。いずれにしても，ここには BE の Eduard の内心の興奮がそのまま文字と化して説明抜きで放り出されていると考えざるをえまい[9]。

---

7) また，少し注意して読めば，“Stopfkuchen” にケーキ (Kuchen) を掛けたおどけた調子から，Stopfkuchen が Eduard の好奇心を刺激する対象であることも察知されるかもしれない。

8) S. 26。しかしそれも，当時の浅薄な世評とそれに与する Eduard の無知が刻印された，そのかぎりで humorististh なものでしかない。

9) 以下，同様に Eduard の内心の逆りがそのまま地の文と化していると考えられる箇所をいくつか列挙しておく。

(イ)「赤の砦だ！」(S. 22。宿で Eduard が往時の Störzer との付き合いから，赤の砦と Stopfkuchen の回想へと移行する際に発している言葉。)

(ロ)「思っていた通りの Stopfkuchen だ！」(S. 52。Eduard が赤の砦の門を入って行くと木陰に憩う Stopfkuchen の姿を発見して，こう声を発している。)

(ハ)「手の動き，目付き，そしてその他 Valentine Schaumann 夫人を紹介するために（Stopfkuchen によって —— 筆者補足）動員されたものは —— 何によらずひとつとして筆で説明できるものではない。『ニャーコ』(Mieze) という言葉が話されたその口調だって同じだ。おまけに，野良子ちゃん (Quakätzchen) だと？」(S. 55。Stopfkuchen の身振り，口調その他があまりに滑稽千万だったというのだろう。文章のような体は成しているが，内容的には「これはあきれた」という思いが吐露されているにすぎない。ついでに言えば，「……筆で説明云々」は Eduard が筆の素人であること，また手記の「私性」を示しているかもしれない。しかしいずれにしろこうした表現によって，読者がまたもや対象を real なものとして思い描くことができないのは必至である。

なお Quakätzchen について一言。全集版の注 (S. 452) によると，Raabe はこの作品に着手する直前に Braunschweig 地方に稀にある Quakatz という姓をメモしているという。おそらく，作家はこの言葉に quaken ないし quäken する Katze 程の意味を託したかったのだろう。)

(ニ)「そして血塗られた戦いの砦に対して，爪弾きにされ評判の悪い Kienbaum 殺しの下手人の隠れ家に対して，手を加えうることはすべて，Stopfkuchen はやってのけていた。」(S. 74。これも，赤の砦がいかに変ったかを示すのではなしに，「何と変ったことか！」という単なる嘆声以上の内容を含んでいない。ちなみに，面目を一新したという赤の砦の家屋の有様は，Stopfkuchen のあまりにおどけた，その意味で real とは到底言いがたい語り口によって僅かに提示されているにすぎない。S. 75–76 参照。)

(ホ)「……それからしばらくの間，彼はまたもや本分に没頭した，すなわちもっぱ

第二に，地の文を仔細に検討してみると，Humor や Idylle を感じさせる文章は，もっぱら S. 162 (Stopfkuchen によって真犯人が余人ならぬ Eduard の年上の友人 Störzer であることが暗示される) 以前に集中しており，それ以後はそういった類の文章は全く姿を消してしまい，特に Stopfkuchen と別れて一人になってからの Eduard は，急にまるで友人に乗り移られたかのように Stopfkuchen 風のレトリックを多用する。まず地の文に現われた Humor や Idylle に限って言えば，こういった類の文体は，そのほぼすべてが Eduard が Stopfkuchen と再会する以前，つまり彼が無知な呑気さをもって曲りなりにも何とかまだ周囲を観察する余裕を失っていなかった時点 (S. 52) までの地の文に集中しており，彼が友人と再会して一方的に手玉に取られ始め心の余裕を失ってゆくにつれて，Humor や Idylle はおろか地の文そのものが影を潜めてしまう。ほとんど唯一の例外は，彼が友人と連れ立って赤の砦を後にして町へ向かい，その途中で思い立って昨日亡くなった恩人 Störzer の家へ立ち寄る (S. 156–S. 160) までに見られる idyllisch な文章だが，しかしこれらの文章，とりわけマタイ街についての文章には，Eduard の無知を象徴する Humor が必ず織り混ぜられていた S. 52 以前の Idylle と比較すると，故郷の町に寄せる彼の sentimental な思いばかりが色濃く現われている[10]。

ら食事をした，全くもってひとすじにただひたすら (ganz und gar, einzig und allein, nur, nur) 食事に集中した！」(S. 79。「何とまあよく食べること！」という驚嘆の念がそのまま言葉になったものと解釈しておく。いずれにしろ，ここには記述の具体性の影もない。)

(へ)「夫人がこの時これらすべてのことをどんなに穏かに物語ったかは，筆に尽せるものではない。その場の彼女を見なければ，じっと見つめていなければわかるはずがない」(S. 126。せっかく SE の全知の Eduard のものらしき文にお目に掛かれたと思ったら，「筆に尽せない」「その場に居なければわからない」と具体的な記述を回避してしまう。作家の筆力を云々する向きもあるかもしれない。しかしながら，書き手 Eduard は「慣れぬ執筆」(S. 8) に手を染めているという設定であり，またその設定にある程度の一貫性もあるので，少くともこの場合などは意識的に「素人っぽさ」を出しているのだろうと思われる。だからこそ逆に，作家は，書き手が素人であるという設定に託けて，わざと読者を対象の具体性から遠ざけておこうとしているのではないか，と思われてくる。

10) この Eduard の過度に感傷的な態度に，作家の作為が覗いているような気がする。つまり，Störzer への懐しさが極点に達したところで彼は Stopfkuchen から全く

S. 52 までの Humor と Idylle を例示してみよう。赤の砦訪問前，ホテルの朝食のテーブルでこれまでの Stopfkuchen と自分との音信不通ぶりを呑気に振り返る Eduard。「私たちは，互いに他を顧みるいとまの最も少ない時期に離ればなれになった。今日の文通の手安さは，この際何の役にも立ちはしない。何となれば，――ハガキばやりのこの御時世に，誰がまだ手紙など書くだろう？

私は，18 世紀の後半全部と 19 世紀の 1/3 が首を横に振るのを見やり，故郷の町のホテルで朝食を摂りながら考える，『でもおまえたちは，せめて一度ぐらいはお互いに手紙を書き合うことができたろうよ，おまえとおまえの友人の Heinrich は』[11]」。ここで Eduard は，それなりに交際のあった友人を今に至るまで全く失念していた自分の迂闊さを恥じてあれこれ言い訳を捜しているふうだが，しかしそのおどけた調子からすると，どうやら，友人を忘れていたことや手紙を出さなかったことを真剣に恥じているというよりは，むしろ左団扇で呑気に暮しているであろうかつての友人の生活ぶりを一目覗いてみたいという自分の欲求を何とか合理化してくれる口実を探しているふうに見える。このように，ここでは Humor が Eduard の浅はかな余裕を示す目印になっていると考えられる[12]。

意外な事実を暗示される，というふうに仕組まれていると考えられるからだ。

11) S. 30。「18世紀の後半全部と19世紀の 1/3 が首を横に振る……」とあるのは，この時期に感傷的で熱狂的な生活態度を希求する思潮が流行し，文通による友情の交換が持て囃されたことを踏まえている。これについては Reclam 版の注 (Wilhelm Raabe "Stopfkuchen-eine See-und Mordgeschichte", mit einem Nachwort von Alexander Ritter, Phillipp Reclam Jun. Stuttgart 1963. S. 206) を参照されたい。

12) S. 35–36 には往時の Tinchen の姿が，また S. 39–41 には往時の赤の砦の様が，Humor と Groteske が一体化したような，大いに特筆すべき表現法で描き出されている。これらの箇所は，本来は少年時代 (Gymnasium 卒業前) に赤の砦を初めて訪れた Eduard の視点からする観察の記述であるはずだが，おどけがグロテスクな歪みを生み出して悲惨さをうす気味悪く炙り出すその筆致の卓抜さを見れば，とても少年のものとは思われず，また BE の Eduard の無知の目印である Humor からも遠く，さらには SE の全知の Eduard のものですらなく，結局作家その人の視点が脈絡なしに突如紛れ込んだとしか考えられまい。こうした理由で，これらはこの手記における Humor の基調に馴染まぬ一種の脱線と見なして，本稿では取り

Idylle と Humor の織り合わされた文体が，Eduard の不明ゆえの余裕を象徴していることもある。赤の砦を訪問すべく，宿を出発し町を抜けて郊外に差しかかった時の地の文。「実にすばらしい朝。町では，路地裏がこざっぱりと掃き清められるようまことにあっぱれな働きをしているのは警察であったが，郊外の「田園」では，万象がきれいに体を洗うよう気を配っているのは母なる自然であった。それどころか，彼女はそれを，シャボンやスポンジ，雷や稲妻を使って自分の手でやってのけていた。それで風呂から上がったばかりの子供たち同様，木や藪や草や花の睫毛には，ゴシゴシと洗われたせいでまだ涙がたまっていたし，また中には，ばたばた身をもがいて抵抗した跡がはっきりと見て取れるものもあった。だがそんなことなど何のその，それらは再び試練を克服して今はとても綺麗だった。世界は光輝いていた，そしてその上をすがすがしく快い風が吹き渡っていることも，この朝の爽快さを損うものではなかった。—— 地球の下，処女地カフラリアのベツワナ人やブール人たちの土地では，この数知れぬ世紀の要求によって使い古され利用し尽された古いヨーロッパよりも，夜嵐の吹き過ぎた後の景色が若々しく見えるなどとは思いもよらなかった[13]」。

同様に呑気な Humor に溢れる idyllisch な文体は，Eduard が赤の砦の前に立ってその外観をじっくり観察し，それからゆっくりとした足取りで堀を貫く道を通り，そこにいた白猫に案内されるように門の中へ入ってゆくと，木陰のテーブルに彼が思い描いていた通りの Stopfkuchen の姿を見出す (S. 49–53)，という条にも，あるいはむしろこの長い条にこそ，その最も典型的な現われを見届けることができるかもしれない[14]。

留意すべきは，こうした Humor を基調とした文章や Humor と Idylle の綯

上げなかった。

13) S. 31

14) Herman Meyer は，Eduard が赤の砦を「葦の小屋」(Binsenhüttchen) と呼んでいるのに付言して，「葦の小屋とは明らかに事実の問題ではなく，無数に隠蔽されている文学的暗示のひとつである。蘆や葦 (Schilf und Binsen) は *Geßner* や Ewald von Kleist 以来ドイツ的 Idylle の小道具なのである。」(A. a. O. S. 125) と述べている。

い交じった文章を，単なるラーベ調として片付けてしまうべきではない，ということである。そうではなく，こうした文体は，BE における登場人物 Eduard の不明ゆえの呑気な余裕を浮き彫りにするために，作家自身によって自分の文体のストックの中から意識的に選択，配分されたものと考えるべきだろう。その何よりの証拠は，Eduard が事件の真相を知り友人と別れて一人になってからの地の文には，彼が自分の動顚ぶりを自嘲気味に書いている場合[15]を除けば，Humor も Idylle も姿を消し，Stopfkuchen 風の表現ばかりがやたらと目に付く，ということである。その端的なありようは，前稿≪第二章≫（三）の引用部分に明らかであろう[16]。

(b)　発話現象

この手記は，登場人物たちの会話についても，多くの場合その時その場で話された通りに再録しようとしているかに見える。会話の前後には，地の文がある場合もあればない場合もある。だが，これまでの論述から明らかなように，たとえ地の文があったとしても，ほとんどすべての場合 SE の全知の Eduard の視点は含んでおらず，単にその場にいる登場人物 Eduard の，しかも多くの場合その誤った感懐が言葉と化しているにすぎない。逆に会話の前後に地の文がないのは，その場の Eduard が Stopfkuchen によってひどく手玉に取られて，ほとんど発話の体をなさない言葉を発しているにすぎないか，あるいはまた彼が全身これ耳と化して友人とその妻 Tinchen の遣り取りに聞き入っていることを示していることが多い。

さて，ここで検討の俎上にのぼせてみたいのは，この手記の会話部分のうち，

15) S. 201

16) 前稿 S. 132–133。しかし考えてみれば，Eduard の絶望と Stopfkuchen 風の表現とは必ずしも必然的な関係はない。このような一見不自然な表現形式が選ばれているのは，ひとつの形式に同時に二つの機能を少々強引に担わせようとしているからではないかと思われる。まず，Eduard が Stopfkuchen 風の表現をすることは，彼が今 Stopfkuchen の圧倒的な影響下にあり，従来の自分自身をもこの友人の視点から批判的に見据えているという印，要するに彼の絶望的な思いの目印である。次にそれは作家による読者への作戦の具ともなっている。つまりそのような表現は，今だに謎のままである Stopfkuchen の諸々の発言を，若干のヒントを織り交ぜつつ，読者にそっくりそのまま引き渡してしまう機能をもっていると考えられる。

前後に地の文を全く欠いているか，ほとんど欠いているに等しく，しかも言葉の遣り取りの意味内容が必ずしも一義的でなくその場の光景もひどく不鮮明な類のものである。そのような部分には，まるで**ト書のない脚本**とでも名付けたくなるような奇妙な不透明さが付き纏っていて，読者は会話の前後に自ら**ト書**を書き加えながら読み進むことを余儀されているかのようだ。例えばこんな箇所がある。Tinchen が，謂れ無き殺人容疑に苦しみ抜いた父 Quakatz と自分の過去の生活を物語っている。彼女は，その悲惨な生活は「どんな本にも書き表わせない[17]」と言う。これに続く Stopfkuchen と彼女との会話。

「ウーム」と Stopfkuchen がぼやいて言った。

「色々苦労してきたが，今となってみれば，中でもあの苦労こそ苦労のし甲斐があったのかもしれんぞ」

「いいえ，Heinrich，やっぱりあれはひどすぎたわ。」

「だからこそ」と Heinrich Schaumann が不満げに言ったが，しかし今度は彼の妻が大きな声で言った。

「私はあなたに話させてあげたわ，今度は私にも話させてよ，あなたが話せっておっしゃったんだし。それに Herr−Herr− (1)」。

「Eduard」。

「そうそう，それにお友達の *Eduard* さんが……（以下略[18]）

(1)の部分では，Tinchen はあまりに急き込んで話そうとしたために Eduard の名前を度忘れし，「エー，エー」と口ごもっている。そこで夫が助け舟を出すという場面だろう。本来少くともこの程度の説明は必要だろうし，場合によっては彼女がどんなふうに口ごもったのか，それに対して夫がどんな様子で助け舟を出したのかが想い浮かべられるように描き出されるべきだろう。それらがきれいにすっぽりと抜け落ちていて，読者自らがその埋め合わせする役目

17) S. 104
18) Ebenda

を押し付けられているかのようだ。

またこんな箇所もある。Tinchen との馴れ初めを一応語り終えた Stopf-Kuchen の言葉。彼が Tinchen と恋仲になるまでにはそれほど時間は要らなかった。

「彼女は今ではもうオレのガール・フレンドで被後見人だったし，オレは彼女の守護聖人，聖 Heinrich von der Hecke（垣根の Heinrich —— 筆者）だった。ということはつまり当然のことながら——」。

「Lieber Mann——(1)」。

「Liebe Frau(2)，そして同様に当然のことだが……（以下略[19]）

この箇所では，(1)(2)の兼ね合いについて二通りの解釈が可能だろう。まずごく普通の解釈。Tinchen と Stopfkuchen 双方が，当時自分にとって相手がどういう存在であったかについて，それぞれズバリと「愛する男（ひと）」(Tinchen)「愛する女（ひと）」(Stopfkuchen) と言って，自分たちがすでに将来を約束し合った間柄であったことを洩らしている，とする解釈。もうひとつの解釈の仕方。夫が自分たち二人だけの過去の秘め事をあまりにも露骨に他人に洩らそうとするので，気恥しくてたまらない Tinchen が夫を諌めて「あなた——」。Stopf-kuchen はこの妻の口出しに中断されずに，かえってこれを「愛する男（ひと）」という意味で転用して，「愛する女（ひと）」と巧みに自分の話を続けてゆく，と取る解釈。どちらの解釈を採っても前後はうまく繋がるが，後者の方が面白いし，また絶えず言葉遊びや冗談を弄ばずにはおれない作家の傾向を考えても，後者の解釈を採るべきかもしれない。

一般に，このような解釈の両義性や場景の不鮮明さが生ずる[20]のは，本来あるべき語り手による説明の欠如に起因しているということになろうが，考えて

19) S. 89

20) 同様の箇所としては，S. 63, S. 65, S. 81, S. 167, S. 174–176 等々枚挙に暇がないほど沢山ある。

みれば，厄介なことに，この手記はもともと全知の語り手の視点を故意に伏せた再現をその基本的手法とするのであるから，所詮まともな説明など求むべくもないのである。つまり，まことに奇妙なことに，このような意味不鮮明な会話部分に行き合った時，己れの想像力に少々不当に鞭打って作品の欠を補うよう読者に強いるのは，作品の語りの仕組みそれ自体である。読者への謎かけのために考案された語りの仕組みは，時に作品への読者の参入そのものを危うくしている。

この手記には，もうひとつ，全知の語り手を伏せた再現という手法から何とか説明しうる特異な発話現象が見られる。既に述べたように，この手記では，地の文は主に登場人物 Eduard の観察や感懐を示しており，従って彼が Stopfkuchen や Tinchen の話に固唾を飲んで聞き入っているような場合には，地の文も話し手以外の者の発話もほとんど全く姿を消してしまい，Stopfkuchen や Tinchen の一人舞台が成立する。そしてこうした一人舞台において，そんな場合にとかく抜け落ちてしまいがちな臨場感を多少とも確保するために主に聞き手の反応ぶりを暗示するある種の仕掛けが施されているが，ここで問題にしたいのはこの仕掛けについてである。

例えば Tinchen の昔語りの中でのこと。父 Quakatz が最初の卒中の発作で倒れ，21 歳の彼女が大きな農家である赤の砦を一人で切り盛りし始めた頃のあるひどい嵐の夜のこと，下男下女は彼女の反対を押し切ってダンス・パーティーに出掛けてしまい，彼女は頭の呆けた父と二人っきりで不安な夜を過していた。そんな夜に，Stopfkuchen がふらりとしかも大声で歌を歌いながら砦を訪ねてきた。大学を中退して故郷の町に戻っていた彼は，そのまま砦に居着くことになる。そのひどく不安な夜のことを語る Tinchen の長い話の中に，「Jawohl, singen—an dem Abend, Heinrich?」「Singen? Nicht mal vor Angst!」，「Singen? [21]」と三度似たような問いかけが現われる。たしかに，彼女がこの話を語り始めた直後，傍らの Stopfkuchen がある歌を口ざさむと[22]，

21) いずれも S. 127。
22) S. 126。

彼女は，いいえ，その晩は歌を歌っていたのではなく，不安に怯える父に話しかけていたのです，と反論してから話を進めているのであるから，一方においてこれら三つの「Singen?」は，彼女が夫のこの半畳に対して「あんな夜に歌など歌えるものでしょうか？」と軽く非難していることを示している。だが他方では，Stopfkuchen はその問題の晩実際に大声で歌いながらやってきたのであるから，その文脈で言えばこの三つの「Singen?」には，「あんな晩に歌いながらやってくるなんて，あなたはなんて人騒がせで変った人なんでしょう？」という，Tinchen の夫に対する感謝と当惑の入り混った気持が込められていると言えよう。こうしてこれら三つの「Singen？」は，一人で話し続ける話し手（Tinchen）と側で聞き入る聞き手（この場合は Stopfkuchen）との関係を，一応何とか提示する役目を果していると考えられる。

また，Stopfkuchen が酒場 der Goldene Arm で聞き手（Eduard と女給の Meta）を完全に自分のペースに引きずり入れて Kienbaum 殺害事件の意外な真相を延々と語り続ける条では，一人で語り続ける Stopfkuchen 自身が動顚する聞き手を随所でからかったり彼らにあれこれ問い掛ける格好で，一人語りの中での＜話し手対聞き手＞関係のありようが何とか暗示的に提示されている。例えば，Stopfkuchen は，Quakatz の葬儀の話の冒頭で，参列者の中には Störzer もいた，と言ったところでビールのお代りを注文し，「じゃあ，君もまだ耳を傾けていることだし……[23]」と Eduard に一瞥をくれてから本題に入ってゆく。Eduard は酒場に来る前に，事件の真犯人が昔の年上の友人 Störzer であるらしいことを Stopfkuchen から仄めかされて以来，「半ば世界の崩壊[24]」に等しい激しい心の動揺の中にあったはずだ。彼は，今度は酒場で，おそらく自分の聞き違いであることを祈る気持で，Quakatz 晩年の生活の様子からゆっくりと再開された Stopfkuchen の話に固唾を飲んで聞き入っていたことであろう。そんな彼のことを先刻承知の Stopfkuchen は，ここで何食わぬ顔で Störzer の名前を口にして，いればこの言葉の友人に与える衝撃の程度を見定

23）S. 171
24）S. 164

めながら話を先に進めているように見える。読者は，上の Stopfkuchen の「じゃあ，君もまだ云々……」という言葉に促されて，Eduard の苦悩に引き攣った表情を想い浮かべてみてもよいだろう。

Stopfkuchen の話は続く。Quakatz の葬儀である男の挙動が不審であることに気づいたのは Stopfkuchen だけであった。彼は一人でこの男を問い質そうと決める。（彼は「老人」とだけ言いその男の名前を種明ししない。）ここで女給の Meta が震える手でビールのお代りを出す。すると Stopfkuchen は（おそらくジョッキーを上げてだろうが）「Eduard, 君の健康を！ 葬儀の二・三日後に早くも最初のチャンスがやってきた。オレは手紙を一通受け取って言った，『なあ，Störzer……』[25]」。ここでも，Stopfkuchen の語りの演出は出来過ぎと言いたくなるほどよく出来ている。Stopfkuchen は，これまで例の挙動不審の男が誰か種明かしをせず，Eduard（ともちろん女給の Meta もだが）をさんざんじらした挙句，「君の健康を！」などという心にも無い科白とともに，その不審な男が Störzer であることをズバリと言い放つのである。この場合「君の健康を！」とは，この後に続く言葉による Eduard の衝撃を故意に増幅しようとして言われたものとしか考えようがない。ここで読者は，例えば Eduard の額に苦悶の油汗が滲んでいるのを，またこの友人の様子に満足げににやりと口の端で笑う Stopfkuchen の表情を想い浮かべてみるのも悪くはなかろう[26]。

さらに Stopfkuchen の話は進んで，彼が Papenbusch なる林の中の道で Störzer を尋問する条でこの殺害事件の真相暴露はいよいよそのクライマックスを迎える。ところが，この林の中の道で偶然 Störzer に出合うまでの経緯をコマゴマノロノロと話す Stopfkuchen。と彼は急に言い出す，「オイオイ，じたばたするなよ，マリーちゃん，いやメータちゃんだったかな。オレは少々体が横に広がって（breit。冗長な，という意味もある。—— 筆者）おって——バカ話をする時の話し方も同様でね。だがそのかわり他の連中はその分だけ手っ

25) S. 177

26) 同様に Stopfkuchen が一人語りの中で Eduard を挑発してからかったり話しかけたりする箇所としては，S. 180, S. 181, S. 182, S. 185 等々これまた多数列挙しうる。

取り早く片付けるわけだから，結局のところは全体として差し引きゼロって勘定になるのさ[27]」。こう言って彼は動ずる様子もなく前と変らぬノロノロした調子で話し続ける。読者は，この Stopfkuchen の言葉によって，聞き手の一人である Meta がひどくじれったがっているのがわかるだろうし，なんならさらに，彼女がこう嘯く Stopfkuchen に内心ひどく腹を立てながらも，事件の核心を知りたい一心でひとまずぐっと自分を抑える様子を想い浮かべてみるのもよいかもしれない。（しかし実のところを言えば，読者も Meta 同様にひどくじれているにちがいなく，このような手記全体の Retardation の仕組みについては「語りのトリック」の項で述べる。）

以上検討してきたように，一人語りにおけるこの奇妙な発話現象は，全知の Ich-Erzähler の視点を故意に伏せた BE の再現というこの手記を秘かに貫く手法のために，時に地の文も他者の発話も消え失せてある一人の人物の話のみが延々と続くような場合に，当然抜け落ちてしまわざるをえないその場における＜話して手対聞き手＞のありようを，当の話し手の言葉によって何とか提示しようといういわば苦肉の仕掛，と言うことができよう。（だが実を言うとこれは多分に形式論に傾いた説明の仕方であって，手記の内容に着目して説明すれば次のようになろうか。そもそもこの手記においては，登場人物による Erzählung が Handlung の主要部分を構成しており，そうした Erzählung が純粋な意味で枠に囲まれた独立した物語をなすことは全く無いと言ってよい。つまりそれは，多くの場合，質と程度の違いこそあれ，その場に居合わす者たち（潜在的に居合わす者たちも含む。例えば世間。究極的には読者も。）の葛藤の証し以外の何ものでもない。例えば，事件の真相を暴露する Stopfkuchen の話は，彼の Eduard や Meta（そして彼女の背後の世間，さらには彼を媒体とする作家の読者）に対する攻撃の意図を抜きにして，一体その真の意味が理解できるであろうか。従って，Stopfkuchen や Tinchen の一人語りも，話を何とか一人占めにしているだけのことで，純粋な意味での Ich-Erzählung ではない。そして，ここで取り上げた奇妙な発話現象こそ，聞き手に対する話し手の意図

27) S. 183

を暗示するかぎりにおいて，延々と続く一人語りが実は一個の Handlung であることを何よりも象徴的に明示していると言えよう[28]。）

（二） 背景の欠落

以上に検討してきた諸現象は，この手記を，主に BE を再現しようしたものであると把えることによってはじめて説明しうるものであるか，ないしはこうした再現行為を側面から支持するものであった。次にここで問題にしたいのは，備忘のための私的な記録という，この手記の私的な性格に直接由来するところの「背景の欠落」とでも称すべき現象についてである。記録者 Eduard は，手記の半ばを過ぎたあたりに挟み込まれた SE でほとんど初めてこの手記を書く目的に触れて，「これを，後に我家で，繁忙をきわめる日々の生活に時折訪れる割合静かな一時（ひととき）にくつろいで手に取るために」(S. 119) 今船上で「記録」(Ebenda) している，とその私的性格に言及している。この私的性格を，単に小説形式の問題として片付けてしまうと手ひどいしっぺ返しを受けることになる。仔細に検討してみると，この手記は，本物の私的記録が他人に難解であるのと非常によく似た難解さを持っている。すなわち，本物の備忘のための私的覚書に記録者本人に関するくさぐさの説明が現われないであろうように，手記の中で，Ich たる Eduard に自明の事柄は全く削除されてしまうか，きわめて断片的かつ散発的に触れられるにすぎないので，例えば彼自身の生い立ちや現在の境遇やその人生観，さらには今回のドイツ滞在の経過などについて，読者はまことに曖昧模糊としたイメージしか描き出せないのである。この現象を，一応「背景の欠落」と名付けてみた[29]。

まず，Eduard の生い立ちや現在の境遇についての記述の，はなはだしい散在ぶりを見てみよう。彼の父は郵便局勤務で最後は郵便局長まで務めた人物であるが[30]，

28) 以上の付言は，前稿 S. 120 注 (5) への付言でもある。

29) この現象は，一人で話を独占することの多い Stopfkuchen の人物像についても言える。それは，彼の話が独立した Erzähluug ではなく，Eduard や Tinchen や Meta への挑発や攻撃の具としての Erzählnng であるために，然るべき背景の提示がしばしば抜け落ちてしまうからであろう，と解釈しておく。

30) S. 16

小市民の典型といってよく，家の経済状態もあまりよくはなかった[31]。要するに Eduard の出自は小市民的なものだった。少年時代の彼は学業優秀で[32]，またその頃年上の友人である郵便配達夫 Störzer から，彼の人生を決定づける海外雄飛への夢を植え付けられた[33]。大学卒業後，彼は船医として Hamburg—New York 航路で働いていた[34]。彼の生い立ちに関する記述は，ほぼ漏れなく収集・提示してみてもせいぜいこの程度であって，読者は彼の容姿はおろかその Familienname すら知らされないのである[35]。しかも，引用箇所を見ればわかるようにそのはなはだしい散在ぶりである。次に彼の現在の境遇についての記述はどうであろうか。彼は海外移住者 (Kolonist[36]) として，「オランユ川沿岸の地主かつ大羊飼育業者[36]」として成功して一財産築き[38]，国家的重要人物であるかどうかはわからないが，少くとも Bur 共和国の大統領の友人[39]でありうる程度の地位は占めているようである。このように，彼の境遇についても，具体的に想い浮かべうるにはあまりにも取り留めのない記述という他はなく，また記述の所在の散在ぶりも「生い立ち」の場合を凌いでいる[40]。

また，Eduard が成功した自分の人生に対していかなる評価を下しているかについても，必要な具体的記述が全く欠けているといってよい。これについては前稿で一度触れている[41]ので，ここではもう一例を付け加えるに留める。赤の砦での昼食前の語らいで，Stopfkuchen が自分の少年時代の姿に触れながら，「『早いこと』ばかりが走る助けになるとはかぎらんのさ，Eduard[42]」と人生

31) S. 12–13
32) S. 47。
33) S. 20–21
34) S. 132。Stopfkuchen の話の中で一言だけ触れられている。
35) まるでこれと呼応するかのように，Tinchen も彼のことを Eduard さん (Herr Eduard) と Vorname でしか呼ばない。S. 149, S. 153
36) S. 168
37) S. 25
38) S. 7
39) S. 8
40) しかし記述の具体性の乏しさは，Eduard を一定の時代精神を象徴する典型的人物として把えることを妨げはしないであろう。
41) 前稿第二章（二）S. 127–128

を要約してみせると，Eduard はこれに対して「『ごもっとも！』と私は万感を込めて，あらゆる人生の実績を踏まえて，アフリカの下の果てから溜め息まじりで言った[43]」という自信のない態度を示している。たしかに，Eduard が南アフリカで「早いこと」によって数々の「人生の実績」を収めた人物であろうことはおおよそ察しが付くし，また彼がこうした自分の成功に対して必ずしも満足してはおらず，むしろ空しさに苦しんでいるらしいことも漠然とながら想像できなくもない。しかしながら，我々読者には，彼の具体的な人生はもとより，それに対する彼自身の否定的な評価の何たるかも知らされてはいないのだから，土台具体的に理解しうるはずがないのである。

同様に，今回彼がいかなる経緯でドイツへ里帰りしたのか，また故郷の町における彼の滞在がどのように経過しそれに対して彼がいかなる感想を抱いているのかについても，彼が多くの人々と再会し一緒に飲み歩いたということが漠然と少しばかり書かれている[44]以外には，一切具体的な記述はないといっていい。従って例えば，彼が赤の砦で上品な婦人に変貌した Tinchen の様に感じ入って，この赤の砦では今までの「帰郷の失望[45]」に代って何か楽しいことがありそうだと期待に胸をワクワクさせている様子を示されても，我々読者としてはただ困惑するしかないだろう。なぜなら，「帰郷の失望」など初耳であるし，またここでもこれ以上の記述は一切ないからである。あるいはまた，昼食後友人夫婦と共に砦の上に立った Eduard は，汽車が遠くへ走り去るのを眺めやりながら，この生れ故郷への疎外感を「再び」感じている[46]が，しかし読者がこの「疎外感」とやらについて聞かされるのはこれが初めてなのである。しかもこの後の部分にも，この故郷喪失者の寂寥感とでも言うべきものの具体的な記

42) S. 67
43) Ebenda.「アフリカの下の果て」とあるが，アフリカへ移住した自分の人生全体を振り返っている Eduard の思いが，こんな表現になって現われているのだろう。
44) S. 8–11
45) S. 56
46) S. 123。「私が，生れた町に，故郷の土地に今ではいかにわずかの拠り所しか持たないか」(Ebenda) を痛感している Eduard の胸中を，ここでは故郷への疎外感と要約した。

述は一切ないのである。

ところで Eduard の人物像におけるこのような著しい具体性の欠如は，この手記に付き纏う不透明性に大きな一石を投ずるものと見てよいだろう。すなわち，この作品の中心的なモチーフのひとつは， Stopfkuchen と Edvard の間の生き方や世界観の対比性を提示する点にあるが，片方の Eduard の人物像が不明確であることによって，もう一方のおそらくは肯定的なものを象徴しているはずの Stopfkuchen の人物像の輪郭さえもが，ぼやけたものになってしまうからである。言ってみれば，この作品における肯定的なものには，最初からあるか無きかの輪郭しか与えられていないわけである。しかしながら，この作品に対してこんなことを言ってみてもぼやきにしかならない。作者は初めから読者にサービスする気などさらさらなく，かえって，たった今も，手記の「私性」を一個の小説形式と高を括り自分を導く作家の手の存在を無前提に信じてかかる読者の小説作品への通念に肩透かしを食らわせたように，作家の念頭には読者を騙しからかい試すことしかないようだからである。従って，この作品の読者は，読むことを放棄してしまうか，さもなければ作家の用意した数多の試しに応じてみる他はないだろう。上で述べた中心的モチーフの不透明さも，それが，作家の不手際によってではなく技巧によって仕組まれたものであるとすれば，所詮読者が埋めるべき空欄でしかないのかもしれない。（続く）